

沖縄の色

人間科学部 三星宗雄

はじめに

2007年11月に、2007年度奨励共同研究のテーマである色彩景観の調査のため、沖縄に出かけた。11月末ということですが蒸し暑さはなかったが、それでもセーターを着ている人はまばらで、中には半袖の人もいたので、かなり暖かかったようだ。「ようだ」と書いたのは、私自身は温度感覚が麻痺し、暑いのか寒いのかピンと来ず、どうなっていたのか判然としなかったからだ。そのため何を着たらいいのか分からず、結局こちらの冬のスタイルと同じく、セーターを着たまだった。

今回の調査の目的は、1. 沖縄の自然の色彩の特色、2. 沖縄の建築物その他の人工物の色彩の特色、についてのデータを収集することであった。調査した場所は沖縄本島のみであった。沖縄については、その自然、文化、歴史などについて残念ながら著者にはこの段階ではあまり知識がないので、詳しい報告はもう少し後で行いたいと思う。

調査は主に写真撮影によったが、一部必要な対象には、日本色彩研究所発行の「色見本帳」(系統色名)を用いて、色の測定を行った。また測定時の照度をミノルタ照度計(T-10)を用いて計測した。

1. 沖縄の自然の色彩

11月末であっても、デイゴ、ブーゲンビリア、ハイビスカスなどの原色の花々はいたるところに見られた。山々に紅葉はほとんど見られなかった。しかし筆者が以前訪れたアマゾン河流域の熱帯雨林を初めて見た時のような明るさといった印

象はあまりなく、どちらかという本土とのつながりを強く感じた(三星, 1993; 1994; 1997; 2006 a)。マツの木(リュウキュウマツ)をいたるところに見た。熱帯と亜熱帯気候帯の違いかも知れない。いずれにしても沖縄本島に本土とは違う、特別な自然環境(植生環境)というものは感じなかった。

その中で特に気がついたのは、ススキの多さとフクギという木である。沖縄のススキは、関東近辺でみるものに比べやや灰色がかっており、花の形もやや異なるようだ。沖縄にススキがこのように蔓延しているとは予想外であった。ススキは沖縄本島よりもさらに南の石垣島でも、原を形成するほど繁茂しているようだ(安間, 2007)。

多くの家屋の周りにフクギを見た。フクギの木は、台湾やフィリピン原産の常緑高木で、成長すると10m以上の高さになり、葉が肉厚で、塩害に強く、沖縄では昔から防風林、屋敷林として植栽されている(安間, 2007)(写真1, 2)。5月ごろクリーム色の小さな花をつけ、その花が落ちて、庭と垣根を越えて外側の道路を埋め尽くす。うっすらと黄緑色に変わった道路はじゅうたんのようで、土足で歩くことが躊躇されるほど軟らかいという(安間, 2007)。実は6月ごろにでき、直径6cmぐらいで、熟するとちょうどカキに似ているという(安間, 2007)。一度ぜひ見てみたいものだ。

関東では見ない風景の1つはサトウキビ畑である。サトウキビは例年10月から12月に植え付けし、14ヵ月後、すなわち翌年の12月初旬に収穫する。収穫期間は4ヶ月である(安間, 2007)。収穫期にまだ少し早かったせい、畑にはサトウキビが林立していた。サトウキビが刈り取られた

後は、視界が開け、景観が一変するという。サトウキビは直径3cmばかりの細い竹という感じで、お土産に「切身」を2、3本購入し、帰京後味を試そうとしたが、固いこと、固いこと。皮をむく時、あやうく包丁が欠けそうになったほどである。しかし中の汁は確かに砂糖、それも黒砂糖、の味がした。

青い空と海、白い砂浜、白い石灰岩など、植生以外の自然環境は別である。どこまでも透明な海水、遠景として眺めた時のエメラルドグリーンの色、主に死んだサンゴの枝からなる白い砂浜は驚きであった。アマゾン河はどこまでも濁ってお



写真1 フクギの木（高速道路 宜野座パーキングエリアにて）



写真2 民家を囲むフクギ（海洋博公園内にて。中央に見るのはヒンプンと呼ばれる「目隠し」。門から玄関が直接見えない。悪霊をさえぎるための風水思想の表れとされる）

り、特に宿泊したマナウス近辺はネグロ河という大支流が本流に合流する地点であるが、ネグロ河は文字通り真黒な水の河なのである。こうした色彩が沖縄の人々の色彩感覚に影響を及ぼさないはずはないと思うが、その考察は今後の課題としたい。

道路でつながっている小さな島（伊計島）に渡った時、縄文時代の遺跡（仲原遺跡）があるというので回ってみた。草むらの中にあるその遺跡の周囲には、「ハブに注意」の立て札が！その遺跡はハブが守護神となって残ったのであろうか。遺跡めぐりも命がけである。

後で記すように、那覇のシンボルカラーは白であるという（山川，1999）。沖縄を代表する産物であるサトウキビとパイナップルの花はどちらも白である。それとフクギのクリーム色の花。こうした植生の花の色が市民のカラーイメージの形成に与っていることは十分予想される。また特産の琉球石灰岩とそれから造られる建築物の色もその要因の一つであろう。ちなみに沖縄石灰岩は厳密には純粋な白ではなく、黄色と白とが微妙に入り混じった「黄白色」である。建築物の外壁にもこの黄白色が用いられている例は多い。

2. 家屋等の建築物の色彩について

家屋等建築物の色彩の特色は何といってもあの赤瓦であろう。しかし赤瓦と言っても、実際には黄赤（橙）に近い色である（写真3～15）。色彩学的なデータを表1に示す。色相は5YRを中心



写真3 赤瓦が少し黒ずんでいる（高速道路 宜野座パーキングエリアにて）。



写真4 沖縄美ら海水族館の外観



写真7 整然と並んだ白い自販機。このように全機が白で統一されていると、むしろ壮観である（同公園にて）。



写真5 赤瓦をいただいたあずまや（海洋博公園にて（表1の1に測色データあり）



写真8 沿道で見た商店（東村付近にて）



写真6 外壁がうすい黄赤色の建物（同公園にて）



写真9 高層マンションにも色彩とデザインへのこだわりが見られる（うるま市にて）。



写真10 勝連城前の博物館。外壁はうすい黄赤である（表1の2に測色データあり）。



写真13 同



写真11 こんな細部にも色彩とデザインへのこだわりが（南城市消防署）。



写真14 これは何？ バス停です。屋根の上にはシーサーが（糸満市）。



写真12 沖縄県平和祈念資料館（糸満市）（表1の7に測色データあり）



写真15 ここはどこ？ 沖縄です。（平和祈念公園から北を望む）



写真 16 首里城正殿 (表 1 の 6 に測色データあり)。空の青と正殿の赤とのコントラストが素晴らしい。



写真 19 同 紅白の二人 (左) は善, 青黒の二人 (右) は悪を表しているという (同)。



写真 17 首里城内のトイレ 右に小さな表示板がある。



写真 20 首里城から見た那覇の街並み



写真 18 沖縄の踊り ゆったりと悠々の時間が流れる。思わず竜宮城を思い起こさせた (首里城にて)。



写真 21 同

表1 建築物の測色データ

	屋根	柱	その他
1. 沖縄美ら海水族館	7.5R5/12	5R7.5/1 またはN7.5	
2. 勝連城前博物館	5YR6/12		10YR9/3(外壁) 56,000lx(10:50)
3. 伊計小中学校	5YR8/7		10YR9/3(外壁) 69,000lx(12:03)
4. 平安座小中学校	7.5R5/12		5Y9/6(外壁)
同 古い校舎	10YR8.5/6		
5. 首里城守礼門		7.5R5/12	
6. 同 正殿		7.5R5/15	
7. 沖縄県平和祈念資料館	7.5R5/12- 5YR6/12		5Y7.5/1 (瓦をつなく漆喰)

に7.5R~10YRに分布した。明度は5近辺が多かったが、概して5以上であった。彩度はかなり高く、12に達するものもあった。首里城正殿の柱については彩度15を示した。

また家屋の外壁は白またはごくうすい黄赤あるいは黄白色であることが多かった。この赤瓦の色と白またはうすい黄赤、黄白色の組み合わせは、沖縄本島の最北端から最南端にいたる全地域で見られ、明らかに風土色を形成していた。

この赤瓦は明治以前には身分の高い階層にだけ許され、一般平民はわらぶきとされていたのが、明治以降、一般平民にも許可されたとされる(写真22)。

しかし現在のすべての一般家屋がこの黄赤の屋根瓦になっているわけではなく、むしろ多くはないというべきであるが、主な公共建築物には採用されていた。特に印象に残ったのは糸満市にある沖縄県平和祈念資料館で、独特な屋根の構造に加えてこの色彩が採用されており、外壁の白色と共に、明らかに強いメッセージを発していた(写真12,13)。

よく見ると、必ずしも黄赤の色彩一色の瓦だけでなく、その瓦の間を白い漆喰で塗り固め、白い境界線を形成しているものも見られた。平和祈念資料館はまさにそうした色彩の紋様であった(写真12)。沖縄の瓦は凹凸の瓦を互いに抱き合わせて作られており、その隙間に砂と漆喰と藁をスサとして水で練りこみ充填する(杉本, 1999)。それによって台風などの風雨に耐えうる構造になっている。年数が経つと、屋根瓦はくすんだ赤茶色



写真22 海洋博公園にて

に変化し、黄土色の漆喰は白色に変化するという(安間, 2007)。漆喰の白は初めから白ではなかったのだ。沖縄の瓦は灰色瓦から赤瓦へ変遷してきた歴史があり、また北部と南部で素材や焼き方が異なるらしい(杉本, 1999)。

写真20と21は首里城から見た那覇の市街である。ぼつんぼつんとであるが、しかし明らかに偶然以上の割合で目に入り、360度に渡ってこの色彩の屋根を見ると、やはり統一感が醸し出される。驚いたのは那覇空港近くの航空自衛隊那覇基地の中に、同じ黄赤色の屋根をいただいた建物を見た時である。それまでは思いもよらなかったが、類似色の屋根というのは、空から見るとカモフラージュの役割を果たし、防空上でも重要な意味があるのかも知れない。

こうした風景は、筆者が1996年にアルゼンチン北部にあるサルタという町を展望台から眺めた時の風景を思い起こさせる(三星, 2006b)。サルタの街ははるかに多くの屋根が同じ黄赤のコロニアル風となっており、筆者は初めて色彩が統一された街並みというもの意識的に経験したのである。コロニアル風の彩色は南米にはかなり多いようであるが、もともとはスペインやイタリアなどの建築物の色彩が再現されたものなのであろう。沖縄の場合も、平屋の家屋はまだしも、海岸に近い高層のマンションあるいはホテルを遠くか

ら眺めた時など、まさに地中海沿岸にいるような錯覚を覚える(写真9, 15)。

この黄赤と白の組み合わせは、身近なところでは、房総の館山駅周辺の建築物群に見られ、また単体建築物としては横須賀市馬堀海岸の郵便局や横浜ポートサイド地区の結婚式場の建物にも見られる(三星, 2006 b)。もちろんこれらはほんの一例で、他にも多くあるに違いない。館山市や横須賀市の場合には気候的にも温暖であり、シュロなどの植物とともに南国のイメージを演出している。

ただし、青(うす青)やうす緑色の屋根の建物も見られた。圧巻だったのは、うるま市のうるま警察署で、エントランスの柱は強烈な青色、外壁を包むパイプは薄い青であった。外壁自体はうすい黄赤だが、全体としての外観は青の建物であった(写真23)。街中の建物でも案外うす青や特に



写真23 うるま警察署(濃い青2.5PB4.5/10, うすい青2.5PB/7.5/5, 外壁10YR9/3)



写真24 緑色の屋根のトイレ(平和祈念公園)

うす緑の屋根が見られた。

たまたま首里城内で沖縄の踊りを見る機会に恵まれた(写真18, 19)。今は残念ながら筆者には沖縄の踊りについて詳らかにできないが、あれほどゆったりとした踊りを見たのは初めてである。同じ11月に徳島で阿波踊りの実演を見る機会があったが、大変な違いであった。思わず竜宮城を想像してしまった。紅白の衣装を身につけた二人と青黒の衣装を身につけた二人がかけあいをしながら進行する踊りもあった(図19)。紅白は善人で、青黒は悪人を表しているそうである。なぜ紅白が善で、青黒が悪なのかは残念ながら今のところ分らない。紅白は我が国の祝賀の色であり、それと何らかの関係があるのであろうか。

写真24は平和祈念公園にあるトイレである。屋根は緑であった(2.5G/7/8)。また壁の色はN9.5とかなり高い明度を示した。

ちなみに沖縄県の景観形成条例には、色彩に関して「屋根の色彩を黄赤にすべし」というような条項は見当たらない。図1に沖縄県景観形成条例の大規模行為景観形成基準を示す。条例で推奨されていないにもかかわらず、なぜこの黄赤の色が統一的に使用されるようにいたったのかは興味深い点である。今後の研究課題としたい。

ただし、首里城金城地区の景観形成基準の中に、「屋根: 勾配屋根赤瓦葺、又はこれに準ずるものとする。シーサーをのせることは望ましい」とあるそうだ(松尾, 1999)。もっとも筆者はその条文にまだアクセスできていない。

上に述べたように、那覇市デザイン室では、市民アンケート調査により、那覇市の「まちの色」を白っぽいまちづくりに決めたという(山川, 1999)。確かに那覇市内だけでなく、沖縄全体で外壁などには白が多い。白は白い砂浜を連想させる。サトウキビの花もパイナップルの花も白である。しかし白の色に違和感を感じる市民もいるようだ。山川(1999)は、那覇市のタクシーの運転手が「白は北海道の色だ」と言った談話を紹介している。

このように沖縄の色彩は、赤、黄、緑、青および白の主要5色から出来上がっているように思われる。佐藤(1986)によると、沖縄エリアで好ま

れる地域基調色（ドミナントカラー）として、「最高彩度のカーミンレッド」,「コーラルレッド（サンゴ朱）」,「ワインレッド」,「白」,「ビビッドイエロー」,「ビビッドグリーン」,「ビビッドスカイブルー」を上げている。またそれとともに好まれるアクセントカラーとして「最低明度のオフブラック系」を上げている。

それらの色の持つイメージを下に記す（佐藤, 1986）。

- (1) 価値因子：祝祭的な, 民俗的な, 装飾的な, 自然主義的な, 呪術的な, 公式儀礼的な, エキゾチックな
- (2) 情緒因子：晴れやかな, 情熱的な, 楽園的な, ナイーブな, 情が深い, 浮き浮きした, 衝動的な, 興奮させる, 昂揚させる
- (3) 力動因子：凝縮した, 緊張した, 動的な, リズミカルな, 爆発的な, エネルギッシュな
- (4) 尺度因子：膨張する, 進出する, 高い, 長い, 開かれた

こうした傾向には、かつての海洋国家琉球王国としての長い歴史が背景としてあるに違いない。筆者が以前1年間滞在した南米アルゼンチンで出

会った日系の人々は大部分が沖縄出身の人々であった。「進出」,「開かれた」というイメージを持つ色彩への嗜好はそのことを物語っているのではないだろうか。しかしこれは20年以上も前のデータであり、再検証が必要であろう。

3. 空間または造形

上のような原色が用いられても、それほどに騒々しさが増さないのは、建築物の造形（デザイン）に原因があるのではないだろうか。一般の民家では平屋建てが多く、必ず角度をもった（寄棟の）屋根をいただいている。沖縄では現在新築の99%はコンクリート造であるという（四野見, 1999）。しかしコンクリート造といっても、本土で見ると何とも味気ない「四角い箱」ではなく、広いバルコニーがあり、また庇や玄関ポーチの屋根にも瓦が乗っていたり、きわめて豊かな造形趣にあふれているのである（写真11, 14）。

沖縄県平和記念資料館の、あの屋根の形は一度見たら決して忘れることができないぐらい造形趣に富んでいる（写真12）。あの警察署ですら、異彩を放つ色彩もさることながら、玄関の屋根にはしっかりと「唐破風」の向拝が用いられているのである（写真23）。緑色の屋根のトイレの造形もかなり印象深いものである（写真24）。また高層

図1 沖縄県景観形成条例 大規模行為景観形成基準

行為	事項	基準
建築物等の新築、増築若しくは改築又は移転	配置	1 周辺との調和を考えた釣合いのよい配置とすること。 2 道路、公園等の公共の場所に接する敷地境界線からできるだけ後退した位置とし、ゆとりのある空間構成を図ること。 3 敷地内に既存の樹木がある場合には、これを修景に生かすよう配慮した位置とすること。 4 景観形成上重要な山、海岸、河川、歴史的建造物、史跡等に対する主要な展望地からの眺望をできるだけ妨げないような位置とすること。 5 山稜の近傍にあっては、稜線を乱さないよう、尾根からできるだけ低い位置とすること。
	形態	周辺景観との調和に配慮し、全体的に違和感のないまとまった形態とすること。
建築物等の外観の模様替え又は色彩の変更	意匠	1 周辺景観との調和に配慮し、全体的にまとまりがあり、地域にふさわしい落ち着いた雰囲気を感じさせる意匠とすること。 2 屋根、壁面、開口部等の意匠を工夫し、道路等の公共空間や歩行者等に圧迫感を与えないよう配慮すること。 3 外壁又は屋上に設ける設備は、露出させないようにし、建築物本体及び周辺景観との調和に配慮した意匠とすること。やむを得ず露出する場合は、できるだけ壁面と同色の仕上げを施して目立たないようにすること。 4 屋外階段、ベランダ等を設ける場合は、繁雑にならないように建築物本体との調和を図ること。
	色彩	1 できるだけ落ち着いた色彩を基調とし、周辺景観との調和を図ること。 2 自然景観が背景の大部分を占める場合は、周辺の色調や建築物等の規模に留意し、色彩の対比及び調和の効果について配慮すること。

マンションと言えども、やはりてっぺんには屋根をいただいている。しかも複数の！（写真9）。

造形と言えば、忘れることができないのはシーサー（獅子）であろう。シーサーは中国の風水思想における魔除けである。昔はいざ知らず、現代ではシーサーが屋根や、門の上に乗っている光景は見る者の心を和ませる。シーサーそのものの表情のせいもあるが、それが思いもよらない場所に置かれているのを見ると、置いた人の心情が察せられ、思わず気持ちが緩む。

またT字路の突き当たりや三叉路に出てくる悪鬼・悪霊を追い払うための「石巖当」と刻んだ石板、家の門を入ったところにヒンプンと呼ばれる石造りの衝立など、中国風水の思想によって造形された空間は、何もない、のっぺりとした本土の空間に比べ、ある種の造形趣を与えてくれる。ヒンプンは中国福建地方では「屏風」とか「屏門」と呼ばれ、沖縄との文化的なつながりを強く感じさせるものである（赤嶺，2004）。ちなみに首里城そのものも、風水でいう、生気がもつとも集中する場所の吉相地に建てられているという（赤嶺，2004）。

4. 亀甲墓

風水では、その説にかなった良い場所に墓を造れば家や子孫が繁栄すると考えられており、沖縄では17世紀以降外見が中国福建の墓と類似した墓が造られるようになった（赤嶺，2004）。

写真25はその一例である。本土の墓と比べ、縦よりも横に広い、大そう立派な建造物で、やや



写真25 亀甲墓（平安座島付近にて）

もすると一軒の家と間違っしまいそうなものまである。墓の色彩は青、黄緑、黄色、グレーなどさまざまであった。ちなみに青のマンセル値は2.5PB7/3、黄緑は2.5GY9/3、グレーは5R9/1であった。他に5Y9/3、N9.5、2.5PB7.5/1のものがあった。概して明るく、パステル調の色彩である。この点も本土の墓とは大違いである。

風水思想は地を女体・母胎として見立て、大地母神的な信仰から生み出されたとする説がある（赤嶺，2004）。女体・母胎が持つやさしさやおおらかさ、これこそが沖縄を象徴する風土なのではないだろうか。

5. 結びに代えて

沖縄の秋～冬にかけての色彩について速報として報告した。沖縄県は明治の維新政府による廃藩置県までは琉球王国というれっきとした独立国であった。それが維新政府による措置（琉球処分）によって、強制的に日本に組み入れられることになった。それまでは東アジア交易のコーナーストーン（赤嶺，2004）としての貿易立国であった。特に中国とのかかわりが強く、現在でもいたるところに中国文化の影響が見られる。シーサーや石巖当、ヒンプン、亀甲墓などの風水思想に由来する造形物はその代表的なものである。

明治維新政府による琉球処分が下るずいぶん前に、実は琉球王国は島津薩摩藩の侵攻を受け、敗戦の憂き目に遭った（1609年）。その後の日本政府による併合。さらには太平洋戦争における日本の敗戦による米国の統治、そして再び日本への復帰という激動の時代を歩むことになった。

青い空と海と白い砂浜、黄白の石灰岩などの沖縄の自然が持つ色彩に加えて、そうした歴史的背景からくる中国、日本、東南アジアおよびアメリカの文化に端を発する色彩的影響が、今の沖縄の色彩景観を形成している。そういう意味では沖縄はまさに色彩のるつぽである。かつての海洋国家としての琉球王国を、赤嶺（2004）はコーナーストーンと呼んだ。交易ルート上ではコーナーストーンかも知れないが、文化的にはるつぽである。そうした文化の一側面としての色彩のるつぽを一つ一つかき分けていくのは骨の折れる仕事である

が、今後継続して取り組んでいきたいと思う。

しかしながら沖縄の色彩環境は決して楽観的なものではない。あの白いサンゴの枝からなる砂浜が、いわゆる「景観論争」の波に洗われているのである。写真26に首里城の近くで見た反対の看板を示す。同じような論争は石垣島でも生じている。これまでと同じく、現在、したがって過去とも、融合した色彩の本当のつぼのままであることを祈るばかりである。

最後に、とある食堂で出会った女性の話を記しておこう。昼食を食べていたところ、背後で通常とは異なる二人の会話が聞こえてきた。その女性が聞き取り調査に応じていたのだ。女性は年のころ筆者よりやや上と見た。聞き取り調査が終わった後、当女性はシーサーの制作者であることが分かった。しかしその聞き取り調査の内容はシーサー作りを始めた経緯とともに、今度の沖縄戦で両親と兄弟が亡くなった話が出てきた。沖縄の人々にとって戦争はまだ終わっていないのである。



写真26 沖縄における景観論争（首里城の近くにて）

引用文献

- 赤嶺守（2004）琉球王国，講談社。
沖縄県景観形成条例 大規模行為景観形成基準
<http://www.pref.okinawa.jp/tosikeikaku/keikankeisei/keikankeiseikizyun.htm>
- 佐藤邦夫（1986）風土色と嗜好色—個性化時代の色彩計画—，青娥書房。
- 四野見久仁子（1999）沖縄市に見られる戸建住宅の形と色，環境色彩研究会・沖縄研修報告 沖縄のまち・風土色を考える，日本色彩学会 23, 2, 91-92.
- 杉本賢司（1999）那覇雑感，環境色彩研究会・沖縄研修報告 沖縄のまち・風土色を考える，日本色彩学会 23, 2, 92-94.
- 松尾恵理子（1999）シーサーのいる街並み，環境色彩研究会・沖縄研修報告 沖縄のまち・風土色を考える，日本色彩学会誌 23, 2, 90-91
- 三星宗雄（1993）アマゾンメモ—色彩・環境・熱帯密林—，神奈川大学・人文研究 119, 43-63.
- 三星宗雄（1994）アマゾンの色彩，神奈川大学心理・教育研究論集 13, 76-96.
- 三星宗雄（1997）アマゾンの空の色，神奈川大学心理・教育研究論集 16, 78-89.
- 三星宗雄（2006a）熱帯アマゾンの色彩—「熱帯は原色の世界」は果たして本当か—，AFT ジャーナル 31, 1-4.
- 三星宗雄（2006 b）環境色彩学の基礎，マックローリン出版。
- 村山幾美枝（1999）「琉球石灰岩」のテクスチャー，環境色彩研究会・沖縄研修報告 沖縄のまち・風土色を考える，日本色彩学会 23, 2, 88-89.
- 安間繁樹（2007）石垣島自然誌，晶文社。
- 山川やえ子（1999）那覇のまちのイメージカラーは白？，環境色彩研究会・沖縄研修報告 沖縄のまち・風土色を考える，日本色彩学会 23, 2, 89.